

えんせき 山鷄を鳳凰とし燕石を珠と見て(重女)

「燕石玉に似て非なる石。韓非子に「宋之愚人得燕石于梧臺之側、颺之以爲大寶、周客聞而觀焉、笑曰此燕石也、與瓦甓同。」  
えんてう  
風織野に收まつて懸條直し云々」を見よ。  
\*えんじち 今日(祝ひ)月二十八日御縁日、不動の刃に喉笛を突き通され(永朝日) 大聖不動の尊像、五月なり縁日なり(會稽山)

【縁日】有縁日の略で、或佛菩薩が婆娑に縁ある日をいひ、又衆生がその佛菩薩に縁を結ぶ日をいふ。不動尊の縁日は毎月三日、八日、十六日、二十八日、及び酉の日であつて、巢林子のこの文は二十八日をいうたのである  
\*えんのぎやうじや 役の行者ともいはるる佛が、若輩らしう何のわざがかりなされう(女殺)

【役行者】役小角をいひ行者は修行者のこと、大和國葛城郡茅原村の人である、佛法に歸依し咒術を善くす、年三十二で家を捨てて葛城山に入籠し、松果を食ひ藤葛を着、鬼神を驅使し、命を用ひぬ者をば咒して之を解し、文武天皇之を聞かれて、妖術をもつて衆を惑はすものとされ、詔して小角を捕へしめられた、小角空を騰つて亡げず、吏捕へることできずしてその母を捕ふ、小角乃ち出て縛に就く、よつて伊豆に流されたが赦に遇つて還り、後唐に行つたといふ。

えんばい 菅丞相は古今の學者、朝廷彌梅の臣下なり(天神記)  
【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

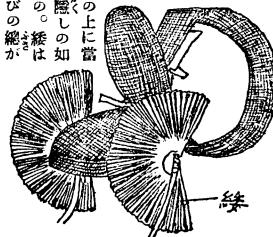
【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。



【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

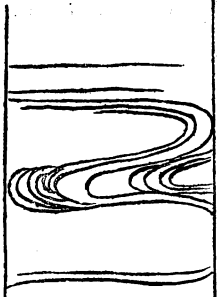
【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

【彌梅】政事を料理めること、尙書、説命に、「若作事和美彌梅靡懈」とありて、藝傳に「美非彌梅」と和人君雖有美質、必得三四人輔導乃能成徳、作業者、醫道則難、梅過則酸、(老人)老後。

の紋章であつて、蛇籠の杭ばかり打つた形であら、その初めは蛇籠の目に杭を打つた形のものであつたといふ。但、夜討曾我(寛永古



〔しがなすうお〕

活字版?)には、「おほすながしは安田の三郎とあつて、この紋給が載つてゐる。異林子のこの文は夜討曾我に據つたのである。

\*おもうそれながら おうそれながら 大將軍の仰せとも覺えぬものかな (百日曾我)

「おそれながら」(乍恐)の延びた語で、謡曲で多く言はれる語である。懼りながら。

負うた門 いろは茶屋から坂町かけて負うた門は七八軒、銀高僅が一貫目餘り(生玉)

\*おうちかた(女腹切) なるお内かた(女腹切) (御内方)御住居。

\*おうつまくつつ 四方八面前築築山、おうつまくつつ隠れつ見えつ業通自在(開八州)

\*おうへ 走り出でんと思へども、おうへには亭主夫婦、上り口には料理人、庭では下女がやくたいの。

おうそれながらーおきなぐさ

目が繁ければさもならず(曾根崎) 扇屋了空夫婦片手に蒲團手づからおうへに敷き(夕霧) お前はおうへに結構な布圍敷いて、腰元衆づらりと並べて御見物なされました (大經師)

「御上」おうへの間のことで、主婦の居間をいふ。「おうへ」とは主婦をいひ「おへ」ともいふ。「おへ」は「おへ」の伴言集覽に「おうへ」に「し」は奥方の事をうへといへり。可笑記(寛永十九年刊)五に「おへ」様のおうへごのみにお姫様のおもてごのみ。

\*おかがみ 女子ども供のお神酒お鏡に向ふ心の眞直なる(倉橋山) 名に負ふ銘の物、今日はお鏡開にて奥の座敷に飾られたり(靈女)

「御鏡餅」。日次紀事(黒川道福撰)十二月の條に、「此月良禮毎々家尊餅作圓鏡形或作菱圓形、供神佛又禮宗親是捨御居鏡其圓而大者謂鏡以其形之相似稱之」と「お鏡開」とは昔時武家にて、男子は具足に、女子は鏡盤に供へし鏡餅を正月十一日に取下り、手または指で割つて食うた儀式。日次紀事、正月十一日の條に、「武家具足鏡餅開。其所供具足之餅時以刀感儀之故以手或指破之、缺之而食之、是謂鏡開云々」。

\*おかさま 忠三殿におか様はなかつたが、こなたはどれでばしごさるぞ(冥途飛脚) 皆おかさまのさしこみと、思ふもじたい、ちのむり(丑井筒)

「おかさま」(御賜座)の略。中流以下で我が妻を呼ぶ「かか」(噓)といひ、人の妻を呼ぶ「おかさま」といふ。おかみさま「かか」をもち。

\*おかめ 道其屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町つぎ(永明日)

「阿龜」ひぢりめん卯月袴及びおひ心中卯月の調色の中に見える人物である。假作人名部「かめ」を見よ。

\*おかもじさま おかもじさまも悟もじに、先お暇といふ籬(松風)

「御賜文字様」おかさま。おかみさま。おかさま。おかさまの女詞即ち文字詞である。もじ詞は足利時代の末期、朝廷式微にして供御の備はらなかつた爲、女官等の名を呼ぶを忌んで、何もじといふ隠語から起つたと云ふ。

\*おがんです 手を引くから猫の、おきを弄ぶ危さや(今宵)

「奥」紅紫の炭火。和名抄に「燧。於炭火、猛火也、又盛也。」の語。「お」は接頭語で、「き」に火の義があるので、起火の略ではない。おきがかり 沖がかりの大船に通路を求め(博多)

「沖掛沖に碇泊してゐること。

\*おきごひ 饗の膳・置鳥・置鯉・香瓶子の香蝶(國性斎後日)

「置鯉」祝宴の席に据置り鯉松尾筆記(卷百〇五)に「婚禮の時のかざり物に、二重手掛・置鳥・置鯉あるべし」。

\*おきつきん 煙草吹きませちらちらと、松にも置の置頭巾 (寄町千景歌)

「置頭巾」置頭巾とも云ひ、四角立した頭巾。

\*おきつづみ 人になをき鼓、横笛が幼名をすぐに付けたる竹の名の (消春筆)

「横笛」能樂の横笛一種の鼓の手であつて、持つてゐる小鼓を置くことも、また置かぬこともある。蓋し置は笛の義で、止める意であらう。異林子のこの文は、人になを置くを能樂の置鼓といふ語にひかけたものである。

\*おきどり 饗の膳・置鳥・置鯉・香瓶子の香蝶(國性斎後日)

「置鳥」祝宴の席に据置り鳥「おきごひ」を見よ。

\*おきなかつら 翁蟹の白髪に、白髮の總髻添へてあり(吉野忠信)

「翁」芝居などにて、翁に扮装する時に被る髪。

\*おきなぐさ みさなかしこき冬の目も、雪を頂く翁草(心五戒魂) 菊には猫のおきな草(佐佐木)



〔んきづきお〕

しらべ、又庭に菊を植ゑて變しけり、翁が歌、  
我庭はきしの松陰しかぞ住む、翁が草の花も  
さかなん、此故事によりて松をも菊をも共に  
翁草といふ由なり」と見えてゐる。二條良基  
撰の勲玉和歌集(群書類従に收めてある)にこ  
の事が記してある。

**おきなのおめん** 翁の面のにこやかに、  
始まり呼ぶ聲に引かれて(二枚袖)  
〔翁は芝居を始める先最初に、翁の面を被  
つて翁舞ひをしたものである。〕

**おきめ** 町人の分でなせ本繩に縛  
つた、きつと訴へておきめにする  
奴なれど(大經師) 強きおきめに粟  
田口(大經師)

**おきよどころ** 親祖父代代おきよ  
所へ柴入れた冥加の爲、薪は嫁が  
續けませう(酒香童子)

**おきわた** まづ頭に置綿や、三平二  
満の大口紅(日本武尊)

**おきをとる** 因縁話おきならう、新七  
めが意見聴きたうない(淀鱈) 宵か  
ら寝させたり休ませた恩徳を忘れ  
たな、よい頼まぬおきなれ(永朝日)

**おくこじやう** 「こじやう」を見よ。  
まづおくくしでも梳かしや

んせ、お齒黒でも召しませい(松風)  
おらんと云ふおくしあげ、髪もほ  
どけてよふたいなく(薩摩歌)

**おくじま** 主も心をおく縞の袴、も  
と渡りの昆布の皮(大經師)

**おくにばら** いらべの姫はお國腹  
(丹波與作)

**おくくめつけ** 今日秘密祝言ありと、  
奥目付より開きたれども(反魂香)

**おくろゝみさま** お位様の御忌中は月  
を日にかへて十二月を十二日、我  
儘ななされやう、すりや三年も名  
ばかり(聖徳太子)

**おくくれ** 小枕なしの高島田、一筋懸  
〔御位様お位高い人様の義。先君子。亡父。〕

の隠し結び、細墨みの平元結、お  
くれな僧みで抜揃へ(吉野忠信)

**おご** なうこなおご、何故に浮  
き浮きなされませぬ(福山遊)

**おご** あれ皆おごの時分ぢや  
(永朝日) 釋迦様の開帳の相伴や  
らおごこや、ばたこやで支度し  
て(安腹切)

**おごし** 御侍の轉訛。晝飯を云ふ土方語  
かへつて聲々に(反魂香)

**おごこしやう** 「こじやう」を見よ。  
おごこしやう 今日七日の巾ひを兄弟一所  
に拜まん、このお骨を持つてあ  
がりしに(寛年草)

**おごさへ** さきの押の盃はいつの世  
に戻ること(女腹切)

**おごさへ** 身はおさへを乗り申す(丹  
波與作)

**おささんたん** 鎌田村のお道場(京の  
お寺のお下り、毎日のおささんたん、  
先から直にお道場へ参られたも  
〔冥途飛脚〕

**おささんたん** 御事「おんこと」即ちあなた様の御事の意  
で、對稱代名詞の敬語として用ゐられ、後に  
親しき同士で足下といふことをおこととい  
ふ。足下。貴方。和友。

**おささんたん** 常陸に鹿島の御社、齋  
宮・御子良子・淺間が猿拜み廻れば  
(國性爺)

**おささんたん** 伊勢太神宮の神儀を調ふる所を子  
良館と云ひ、そこに奉仕する少女を御子良子  
といふ。この文は、伊勢太神宮子良館を云  
うたのである。

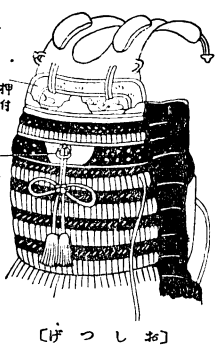
**おささんたん** あの子がおさかて彼の男  
とそべるやうにはなるまいか  
(永朝日) 天王寺の東門をおさかの  
方へ歸りしが(卯月調色)

**おささんたん** おほさか(大阪)をつめておさか」と云ひ、  
また濁つておさか」と云ふ。

話 行事鈔・下三に「美其功德爲讚、讚文不盡、又稱揚之爲讚」  
**\*おしり** さながら袖を押し入もなりがたく(松風)  
 「押入他人の家に入つて財物を奪ふ然勝。  
**\*おしり** 黄金の轡珊瑚の鞍おしり  
 「押掛面懸のことで、馬の頭から轡にかけて結んだ飾紐・貞丈雜記・馬具之部に「おしりかけ」といふはおもがいの事なり、道照愚草に云く、おしりかけともおもがいの云ふなり云々」武家名目抄・輿馬部に「岡本記云、おしりかけと申すはわらし、おもかい(面懸)と申すべし」云々「おしり」を見よ。

**\*おしごと** この伯母がおし事したるその咎め(女腹切)  
 「おし」を見よ。

**\*おしだい** 戦場の進退御陣の押太鼓、萬里を響かす名人故(靈女)  
 「押太鼓」軍勢が押寄せる合図に打鳴す太鼓。傳長記に「軍勢押太鼓を打つて響り來れば」  
**\*おしつけ** 辨慶が押付をいつかとおし(孕常盤) 後に乗りたる源太景季



押付 押付  
 付を胸板へぐつと射抜いて(最明寺殿) 矢止り金物押付板、發傳高紐上巻付(女箱)

「押付」鏡の背面(扇)にあたる板で、普通には染革で包んである。  
**\*おしてるや** おしてるや浪華の春(女殺)  
 「おそひたるや」醜逆(ウ)の約で、即ち波の藤立つことで、難波につけて其詞である。  
**\*おしはだぬぐ** 父縁が人を討つて、其刀でまづこの様に押肌脱ぎ、逆手に取つて左の脇ぐつと立てて(女腹切) 押肌脱いで太刀を逆手に取直す(門田八郎)

「押肌脱」肌を押し脱。太平記・大塔宮藤落の條に「白誓せんと恩召して、既に押肌脱がせ給ひたりけるが」  
**\*おしふにどう** 「おしふにどう」を見よ。

**\*お島の心中** 去歳のお島の心中の、その井筒屋に我が今、重井筒と篠塚に、いばれ岩井の半四郎(重井筒)  
 お島はもと初音と名乗つて京の島原に勤め、時、京の室町御池の邊の呉服商某の次男新八と馴染み、兩人俱に厭落して大層まで逃げたのを、追手の者に發見されて捕はれ、新八は鍔千貫の科料を取られ、初音は浪華の太左衛門、井筒屋の勤女に賣られ、お島と名乗つた。その後新八江戸から下つてこの井筒屋に登りお島と邂逅し、以前の事を思ひ出して互に慰しがり、新八は井筒屋に足繁く通うたが、兩人共に金に窮し、なほぬ身を嘆き、遂に謀合して正月十六日生玉を情死した。永井正流撰、本朝遺千鳥(寶永四年序)巻之四、都の初音難波の心中(附九) 死に生玉囃の條に「お島は胸をばさすりながら、始めての御客様に寂しがらざる氣の毒なかりと、新八は一間にいざなひ身の有様を語りければ、新八も我身をあかし、これより深く通初めしが」

物日物日のそめ代かきなり、井筒内の首尾あしければ、お島は廣き大海知らず、男もするとの根がするならねば、都か難波の住居望めど、かなはぬうき世を恨みかこち、いざ永き末語るべしと、其年正月十六日、二人生玉よき心中難、雲井の外まで物語となりき。(序)に云「其年正月十六日では何年のことかわからないが、この書の内容に寶永四載丁亥初春吉祥日とあるから、この書の作られつ、あつた寶永三年のことであらう」  
**\*おしもつづ** 親介右衛門は六十餘、頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢残らず此處に持集り(二救繪)  
 「霜月」眞宗にて十一月二十二日より二十八日まで報恩講である、此間をお霜月といふ。高橋僧雅(其隱撰海嶽雜談(正徳三年成) 卷二十一、十一月部上)に「報恩講。二十二日より二十八日までお霜月といふ。この文は頭の霜(即ち白髮)にいひかけたのである」  
**\*おしやうじ** 「おしやうじ」を見よ。

**\*おじやる** 「おぢやる」を見よ。  
**\*おぢやれ** 「おぢやれ」を見よ。  
**\*おぢやんす** おさん様いやらしい事おしやんすな(大經師) 眞にこの世の佛ちやといひければ、あのおしやんす事わいの(薩摩歌)  
 「おほせ(仰)られませうが「おつしやんす」「おしやんす」と體訛し、更に「おしやんす」となつた語(を)しやんは「これと別、その條を見よ」。

**\*おしよぼからげ** 大福帳かたげで來るはみやぢやないかといふ所へ、おしよぼからげの忙しげに、皆さんこれにござります(反魂香) 房若は悄悄とおしよぼからげに(破笠絶槍)  
 「おしよぼ」(おし折)を「おしよぼ」(おしよぼ)と誤つた語、衣服の背縫の裾より上の所を裾みぎ帯に挿して端折ること。あづまからげ。  
**\*おし** 曆の事はおされぬと、へらす口して歸りながら(大經師) その祟り知つて居ながら、この伯母がおしごとしたる其咎め(女腹切)  
 「押」強ひてなす。犯して爲す。

**\*おすぎ** 間のお山お杉お玉が弾き語り、お杉お玉はつき煙管、合うたやうで離れ行く、竹になりたや篠竹の、竹は籥に採まるる、やれふれふれ殿中頭中に袖なるし羽絨、拍子揃へて、殿中ちや張脇ちや、やれふれふれ(蘭性雑後日)  
 「阿杉」お杉もお玉も、間のお山伊勢の外宮と内宮との間で、關原堂過ぎて間のお山にかゝる)で間のお山の唄を謡うて、道行く旅人の連れにきくに、童子を踊らせて、道行く三味線、窮の連を乞うた婦女をいふ。この文に「殿中ちや張脇ちや」など、あるは、童子の踊りながら、ふんである。好色旅日記(貞享四年刊)巻四、おはたより山田へ一里半の條に「關原堂過ぎてあひの山、お杉お玉が庭、前にくれぬの網を張り、三味線引て小歌、身に纏繞錦襦をまとい、如後頭、髪をこころとさせ、紅粉製襦袢玉、腕の爪はづれ、どうもいへぬ姿の花、琴宮の若ながめられて、尺八程のよだれをふき、鏡を打に顔にあたらぬをふしきりか」

おしりー おすぎ

百二百文いつのまにかまき散らし、壹歩小判を投げうつたはけもあり、あるは七つ八つ十一二歳の童に鉢巻させ、でんちうはおりの籠子の裁着、膝をすつてうたふ男うなづけばはらちうちや張駄ぢやと踊るあり、みこそしもつ二鐘もらふあり、皆これ此の所の興次郎が御内儀たちむすめ二たち也」あひのきまをみる見よ。

**\*おすゑ** 某が妹は女院様のおすゑの奉公仕る(酒香) 京の御所より女孀がお末が一兩人呼び申さんと申上ぐれば(酒香童子)

〔御末女の飯を調へる所をいひ、内裡に御末といふ所がある。御末に奉仕する女。〕

**\*おそい** そちが今度のおぞい仕様、魔法でもかなふまい(歌念佛)

〔怖ろしい。恐しい程強い。宇津保物語に、「内の后いとおそく心かしくおはし給ふ。怖毛をおぞけ」と訓み、また曲禮上に「知好し禮則志不慍」あつて「慍」を「おぞむ」と訓んである。〕

**おそめ** 瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松はいつの時雨の一雫(今宵)

〔阿波大阪東堀瓦屋橋通り油屋新五郎の娘で、二歳の時丁稚久松に連れられて川邊に行き、誤つて水死した。それが爲久松は新五郎に叱られて縊死したのを、情死したやうに作り替へられたとの説がある。思ふにお茶・久松情死の事實があつたのであらう。〕

**おそめ** 〔半九郎おそめ〕を見よ。

**おだい** 小七様にとんと打込み、二合半の盛切おだいの咽に詰つて、ぎつちぎつちてきないこんでこぼり

まする(宵庚申)

〔御靈(御靈懸)の略、轉じて、餓(大靈魂) 狂言、岡大夫に「白飯とは白のおだいの事。」

**\*おたびしよ** 我等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅所といひさうな住居(盜門松)

〔御旅所(祭神の時神輿を暫く駐める所。おたすきを見よ。〕

**\*おち** おちやめとのの癖として、背に子を負ひ寐させて置いて(貧古教僧) おちばつと氣も亂れ(丹波興作)

大上臈・小上臈・おさし・抱乳母・おちの乳(丹波興作)

〔御乳) おちのひと(御乳人)の略、貴人の兒女の養育をなす者。〕

**\*おちばおね** 嵐漕ぎ行く落葉舟、水に鍔寄る翁川(振袖始)

〔落葉舟(落葉を舟に見立て、いふ語。おちま 落間)にがばと突落せば(安殺)〕

**おちやしよ** 〔落間家の内の床の一段低い室。おちやしよを見よ。〕

**おちやのこ** 常住斬つてのはつての、これ程の喧嘩はお茶の子お茶の子茶の子ぞや(反魂香)

〔御茶子(點心をいひ、轉じて、取上げていふ程でない小事の意にいふ。おちやる 今にお前の氣に入りの事介がおちやりましたよ(薩摩歌) 本心曲つた釣針に釣らるる勘介ではおちやらしませぬわいの(川中島)〕

はあ氣に入らぬやら返辭がない、姉おちや早う参らう(安殺) いきずりめ勝手にいせいで置かうか、男ども皆おちや旦那お出なされ(大無師)

〔おいである(御出有)のつまつて物言化した語。お出である(御座る)おちやらしませぬには「おちやれはしませぬ」の約つた語「おちや」は「おちやれ」の略された語。〕

**\*おちやれ** おちやれの身には何かなる、朝の夜から見世ざらし(丹波興作) 上り下りの旅人の、粹と野暮とに摺れて揉まれて共摺の、招く薄もおちやれおちやれが戀を呼ぶ(編山遊)

〔百人女郎品定所(観西川祐信畫) (れやちお)〕



源西鶴撰浮世花鳥風月(好色四季ばなしの改題)月影うつす露宮(すきやきの條に、「女房ども赤前垂して縁の端に立出で、泊ぢやないか泊らんせ、此書は幕方程積ります、日高なりとも泊らんせ、水風月湧いてござんす、火燈もあり夜着る布圍(貸)しましよ、寧か抱いて寝ましょ、酒のよい所に先お泊りなされませい、内が綺麗でお内儀深の美しい所に泊らんせ」と見えてゐる)いかも在時の悠長な有様を見るやうである)でをんなをみる見よ。

**\*おちる** おのれ落ちすばたただ置かうかと、高小手に縛付け(出世景清) 駄立は三汁九菜、おちた肴を吟味の役人(宵庚申)

〔落白状す。また、死に落ちる。おちり 惣太滅金のやうなる眼をむき、乙に入つたる朋聲(偶田川)〕

〔乙)低下する音調をいひ、甲)對する語「乙に入つたる朋聲」とは、音調低うして胸腹から出るやうな聲で、鐵枯聲のこと。好色二代男(貞享元年刊)卷之三、一言聞く身の行方の條に「自然とく、小の小唄は低う、物言ふまでもおちへ入りて物解なり。〕

**おつち** 今の世のおつちは母の形見ぞや(永朝日)

〔阿波三勝の娘の名。笠屋山勝を見よ。おつかない おやつかない 誓紙を書く(二枚繪) 女御に上げい、后に立てよなどと申して、おやおつかない偽り、あとからはけるはげ頭(用明天皇) 眞實無の義。物の行先知られぬは危く覺束ないものなればそれいりて恐しい(云々) 萬葉集卷十二に「眞實無不知山道乎戀作可

こむ

將來。逃ぐる敵におつすが

おつすが 追越の詠。おひすがる(九)

おつたて 敵は棘味喰おつたて

汁(鰯田川)は汁の名ではない。詳しくは

「追立汁」の條を見よ。

おつらつら 馬や(舟波與作)

「御萬馬」萬馬を養うた馬。萬馬はもと海

の邊をもち編つた九よりの名、後世は竹

または槍の護板を編んで、上に紙を貼り、衣

器を納れるに用ひる籠。さても見事なそれ

は云々をも見よ。

おつとめ お勤過れば表に出で(二枚

繪)

お勤勤行。佛前で誦經すること。

おつぼろがみ 廣國の一子幸若丸、

あけて八つのおつぼろ髪(井筒)

「おぼろがみに促音の増加した語で、「おは

接頭語「ぼろ」は源氏物語「福姫の巻」に「ぼ

ぼろに落ちみだるる木の葉の」などある「ぼ

ろ」であらう。亂髮。蓬髮。

\*御手上げられい 此以後はいつま

でも心安う御意得ませう、お手上

げられいと一禮(露門松)無禮御免

と手をつけば、アア堅い堅い、同

船致し一つ釜の食事たべるは、一門

同然、サア御手上げられ(博多)

座に手をついてそんなに感動になまらな

い、お手を膝に上げて樂にしないの意。

そはきれいといへば。

\*おてき やあよれ様たち歴史のお

寄合、おてき様の待合ひ(淀麴)む

むう殿達(三人、妾がおてきほど

れぢやえ(女權)それやこそおてき

と色めいて、毛剃がつれどもうつ

つをぬかし(博多)

「御敵」敵は匹敵の意。遊女だから相手の客

をいふ。また客から己が相手の遊女をさして

いふ。相方(俚言集覽)に「敵、匹偶を仇と云

に義同し。敵様とも云。

おてらこじやう 「こじやう」を見よ。

お寺の長助 すんぼろ坊主、れつた

い坊主、これがお寺の長助と、笑

うてこそ追つ立てける(會橋山)

お寺の長老といへば禪寺の住持又は先輩の禪

なれど、長助といへば(助は靈助などの助

と同じ)お寺の芋掘坊主の意。心中二枚繪草

紙に、駕籠昇の長介といふ見え、長介は力

役などの書を稱する慣用語。

\*おと 姉が手を引きおと抱く、中

は父親肩車に(女殺)伊東祐親が乙

娘藤の前(冷泉節)

「乙藤の巻。幼いこと。末子」おとむすめ」

は未女。

\*おとがひ 踏まれてさ(あの頃、人

を踏んだらどうある(露門松) 頤の

落つる程こつちからもしやべる(袍

袴) すんち焼きて味喰へつたり

のぬくぬく、頤が落ちます(孕常

でも龍宮でも遊る所へなぞ行かぬ

(鰻田川) はや奥様があるからはお

とがひの雫、叶はぬうき世(娥)

「鰻和訓栞」に「音つがひの義なるべし」とあ

る。下のあぎと。あぎ。露門松に「踏まれて

さ(あの頃)とあるは、踏まれてもなほあの

頭を叩く意である、喧しう悪口するをい

ふ。抱狩(本地)に「頭を落つ」とあるは、頭

が落ちます」とあるは、頭がはげれる程美味

なるをいふ。狂言師山伏に「さてもさてもう

まい柿ぢや、おとがひが落つるやうぢや」。大

經師昔隱に「頭を居るかの意」(頭落ふ)は、口

を利き、しゃべり居るかの意(頭落ふ)は、口

を開するをいふ。「おとがひの渠」とは、頭

の渠口に入らぬといふ感で、手近にあつても我

が物とならぬに譬ふ。

おとぎこじやう 「こじやう」を見よ。

おとぎばふこ 犬張子・入子張子・中

張子、おとぎばふこの裸身も(本領

曾我)

「御加髷子」

あまがつ

の類であ

る。長さ

一尺餘

り、心

に綿を

入れ、白

い布帯で

頭身を包み、黒絲を髪とし左右に分けて胸の



【こふばぎとお】

おとと 大殿の義、大臣、和訓栞に「おとと」大臣を

よめり、又殿とよめり、源氏におととの遊り

さま、又おととなども見えたれば、殿を

も本とすべし、大臣ならぬも其殿にいふ

意也といへり、御殿の義成べし。

\*おとしし、こじの義成べし。

うやう本復召さつたりや、おとし

の大地震、わしは氣痛で床につ

き(永朝日)

「一昨年」をとしの誤、寛文の御と、おと

としの大地震」とあるは、寛永四年十一月富

士山噴火して、寶永山を生じ大時の大地震

ことである。その寶永四年を「昨年」といへる

からして、心中双天朝日の上讀は寶永六年で

あつて、また文中に夏の記事があるから夏

頃である。そして平兵衛・小かん、情死は寶

永六年六月朝日の夜の出来事である。

\*おとな おとな殿(申して取かへ

渡し(薩摩歌) 家の申とな、磯太夫

(お休みと、差出す薄茶茶話の音羽

山、おとなくれたる振を見て 繡袢

三 袖の襷に匂はせて大人くろし

き懸鳥帽子(最明寺歌)

「大人」武家の家老、または時代の老臣(おと

とな)くろしきは、甚だ大人といふ意。

\*おとらじろさ 音羽次郎三を雑喉場

とは、鱈があるとの譬かや(今宮)

「音羽次郎三」元祿寶永頃の大坂の立役の名優

音羽次郎三郎を云ふ。鱈がある」とは鱈に幅

があるの意。役者火燈寶永六年刊。大坂

おとと

おとし

おとしし

おとと

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おとし

おつすがふ おとらじろさ

お江戸上り親あつて、武道にしつかりと寅が入りました、……お顔の色の如く白吉、大柄な笹塚殿と引合せ細うても鏡、弱味のない實方云々。

**おとはやき** 乾山音羽焼の皿の鉢の茶碗のと(生玉) 差出す薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振を見て(鐘聲三)

〔音羽焼〕山城國音羽山下に焼いた所の陶磁器。人倫訓蒙圖彙、焼物師の條に「都に於ても所々にあり、御茶音羽、御齊池、粟田口等にあり」。飛州府志、土産門下「服部郡に」磁器。清水坊音羽山下、粟田口御泥池、其外寄置在二處々、陶入之曠好、而造諸品物。

**おとほね** やい、喧しい音はね立てな(絶符) 音はね立つるな女めと、喉笛の鎖をぐつと刺す(女殺)

**おとまし** 女夫の中の榮耀遣ひか、エエおとましや身代は待持つまい(軍井筒)

**おどもり** 身揚り分のおどもりも東方朔が九千兩(雪女) 萬御世話のおどもりならん、何もかまはせ給ふな(加増我)

油濁の義とどこほり(蒲、または「つか」) (袴)などの意にいふ「おどもり」は「おどまり」ともいひ、果林子作の天神記「第三に」その借鏡のおどまりがやらやうこの頃のいふ驚業」とありて、借鏡が辨へないで滑る意に用ひてある。

**おとや** 鷓鴣みどり丸にて 乙矢を 知ぎ(百合若)

〔乙矢〕はや〔甲矢〕の對で、一手二本の矢の

中、第二番目に射る矢。  
**\*おどろ** おどろの鬚(捕魚) おどろの(髪)(振袖始)

草薙のおどろうと亂れてゐること、刑練などの字を當てる「おどろの鬚」「おどろの髪」とは、くしくやくしくと亂れてゐる鬚または髪。

**おないき** 「ないき」を見よ。

**おに** 御茶菓物等までも試みなき物を參らせたる事候はず、……おにを上げてらるれよといへば(文武五人男) 鬼一口の毒の酒、これより毒のこころみをおにとは名付けそめつら(酒呑童子枕書)

おに(おに) 御煮即ち御煮味のことであつて、君公に奉らん爲に食物を毒試すること。試味、俗説に、毒試するには一口食する故、鬼一口より出た語であるといふ、もとより取るに足らぬ説なれども、酒呑童子枕書業のこの文は、俗説の如く書してある。

**おにぐるみ** 肌理の粗いはおにぐるみ(睡睡天皇)



〔山核桃〕藩蕎麥木で高さ七丈にも達し、種子は食用となる。

**おにしやぐわん** 中にも小西のなにがし、加藤の鬼しやぐわんなんどいふ猛將(國姓爺後日) 日本陣中に入、加藤のおにしやぐわん。

小西のあら者を取取らん(三國志)  
「おにしやぐわん(鬼上官)の配である。鬼は鬼のやうに強い義、上官は頭(かし)の義で武將は軍將をさす。大阪御殿集(延寶三年刊) タ々子由手前田由香で宗因の弟子の句に、

「その鬼しやぐわんはゆるせかへひちと見え、神田白鬚子編(後漢武家名数(正徳六年刊) 卷之二)に「鬼左衛門加藤肥後守清正、豊臣秀吉將」と見え、竹本筑後後孫傳十一行本、國性蓋後日合戦のこの文(四枚目の裏十一行目)に「鬼舍官」と書いてある。『鬼しやぐわん』「鬼上官(鬼舍官)とこれに替へおにしやぐわん、」見上官の配に「普通字を許す大である。朝鮮で加藤清正を鬼上官(おにしやぐわん、またはきじやぐわん)といふた田清正記などに見えぬのみならず、朝鮮人のいふ鬼は日本ではいふやうな剛強な者を鬼とは云はらぬで、非常の死を遂げた者が妄執の靈囃れず、宇宙に迷ひ出て世人に種々の害をするもの、即ち「鬼魂を鬼と云ふのである。されば清正を鬼上官と云ふのも日本で作つた語である。

**おにのしごき** 千草八千草思ひ草、おそろし鬼のしごき草に、隔つる中の垣根草二枚(用明天皇)

「鬼魂草(藜藜)の異稱。奥儀抄に「おにのしごき草は藜藜なり、これを見れば物忘れせず」と見え、果林子のこの文は「恐ろし」というて「鬼につづけ「思ひ草」というたから物忘れをせぬ鬼の醜草にひつづけたのである。

**\*おにみそ** 近來弱味嗜鬼味嗜の汁かけ、鬼食ひ殘す残念残念(振袖始)

焰魔王の氣に違へ、地獄追放の鬼味嗜を御覽ぜと、扇を披き扇き立て(文武五人男)

「鬼味嗜」外見は鬼のやうに強く見えて、内心

は腫痛なるをいふ。虎皮羊質。  
**\*おにをとり** 阿責恐ろし鬼などりの、寺の藪垣物凄く(生玉)

「鬼踊(生玉)鬼の祭禮の時、赤く染めたはぐまの毛を被き、鬼のやうな服装をして鬼の面を被き、棒を振つて踊つただけであらう。今も中國地方で氏神社の祭禮の時、かうした鬼が出る行事の残つてゐる所がある。この文意は、その鬼面を思ひ出して、藪卒の此責を聯想し、亡者を露る寺の藪垣物凄く感じたといふのである。寺とあるだけでは何寺か知られぬが、いづれ生玉の馬場前時明院あたりをいうたものであらう。日本振袖始に「鬼踊ども、活々喜び勇み跳ね廻る、鬼踊ともいふべし」とあるが、皆鬼の鬼どもが跳ね廻る狀が、恰も祭禮の鬼踊に似てゐるから、かくいうたのである。

**おねは** 其ちよきちよきで夕飯のおねは(刻め(宵庚申))

「御根葉菜大根の二葉の稍大きくなつたものをまびき菜。おろぬき菜。浪花方言(寫本、文政二年成)に「おねは。菜大根のかわりの大きくなりたるなり、兼ばかりにて根は不利也。」

**\*おの** おの翼ならなへながら、人の最期を急ぐなる(宵庚申) そなたの毫亂れずや、いや我よりもおの様の、鬚撫附けて抵撫でて(卯月調)

色 おの様の女房も、仕方の悪いことあらば、なぜ殺しなりともなされずして(卯月紅葉)

「おのれ(己)の略。自稱代名詞、われ。おれ。また對稱代名詞、そのは、そなた。おのがしなれる 番匠の棟梁木工の頭修理の頭、おのがしなれる出立(出世景清)

「おのがじしなるの誤で、各人心々なるの意であらう。おのがしなる」としたのもある

**\*おのし** ばておのしの御身ばかりか、不便になさるる四郎二郎まで命を助かることなれば(反響香) ええすしなる、いなしやんせ、おのし様には言はぬぞや(伊豆日記)

「おぬし(御主)の鞆。そなた。おまへ。」

**\*おはぐちおや** お果なされた母様のおはぐる親にならせられ(薩摩歌)

「御齒黒髪はじめて鬘髪で齒を黒らぬ時、親族または知己の中で福徳な女が涅齒してやつた者の稱であつて、鬘髪親ともいふ。徳川時代には涅齒を以て女子元服の徴となし、また結婚の徴とするに至つた。

**\*おはしま** おはしま高く軒長き、流れにうつる築山も(用明天皇) 御階おはしま踏散し、李踏天が膝元にどうど坐し(國性爺)

「おほはしま(大階間)の約。欄干。優名抄に、  
「厭監。於彼之寓。」

**\*おはつ** 遂には兜卒天満屋のお初も佛なかまかや(水明日) 世上に高き天満屋の、お鳥といひてかの里に、おはつが跡繼隠れなし(二枚巻)

お初様のかの夜さり二階の梯子を階外し(二枚巻)

「阿初曾根胸中に見える人物である。假作人名部はつしと見よ。」

**\*おはへる** 追手の聲のあれあれおはへ、おはへて爰に北向の、八幡宮の燈明も(生玉) 突除け突除けおはへ行くを道拂ひ(蛙合駈) 兄様とお

は(縛れて追掛くる(實古教傳))

「おふ(追)をおはへると延べて、他動詞は行下一段に活かした語で「ゆふ」結をゆはへる」といふのと同じ語である。また「おはへる」を「おはゆる」と誤つていふことも、「ゆはへる」をゆはゆる」といふのと同じ類である。おはゆるを見よ。」

**\*おはまり** 今の尼の話が蘭が噂に似た故に、そこを以ての悪推(薩摩歌) いやこれはいかいおはまり(薩摩歌) おお女儀なれば大抵の梅櫻と同じ事に思するさうなが、それは大きなおはまり(西王母) さてもおはまりおはまりと、お通の君の高笑ひ(三國志)

「御漢誤に陥ること。策略に陥ること。たまたまされること。御伽名代紙衣(元文三年刊)に「今世間にたぶらかされし事をおはまりといふ。」

**\*おはもじ** こちの人の吃と私がしやべりと入合せたら、よいころな女夫が一組できませう、ああおはもじやと笑ひける(反響香) 吾妻様を見そめて、ほほほほほ親の口からああおはもじ、戀病みにて煩ひます(露門松)

「おはづかし(御恥)のもし詞。文字詞は、足利時代の末期朝廷式儀にして供御の物備はらなひ爲、女官等々の名を呼ぶを忌みて、何もじといふ大體語から起つたといふ。」

**\*おはゆる** 命をおはゆる鳥の聲(會相崎)

「おはへる(追)の訛。おはへるを見よ。」

「おはゆる、命を追追るやうな心地のする鳥の夜明けを知らす聲との意。」

**\*おはらひ** 來年のおはらひには必らず下りや(女腹切) 藤の棚のれぢ兵衛はこなた程鐘は振られども、お祓の練衆御香舂り、人の氣に入り雇はれて(夕霧)

「おはらひ(大)の天満天神御被祭(六月二十五日)をさす。わりしゆをも見よ。」

**\*おはり** 皆皆お針が縫うたれど、祝うてわれも縫はんとして(歌念佛)

「御針(裁縫師)。  
\*おひ (凱陣八馬)

「笠」行脚僧山伏などが佛具、衣服、食器、書籍など入れて、背に紐を掛け、後に負うて旅行する具。

**\*おひえ** そなたの寐間着のおひえも貸して寐替つてたらぬか(大經師)

「御曳衣」木綿の綿入衣。腰裏見開集三に「首綿を多く入れて夜の物として夜着にする。是をおひえとも北のものとも名付けたり、また異名を布子とも綿入と云ふなり、此詞みな公家より出でたり云々。」

**\*おひかぜ** 情模様の色小袖、追風淺くもれり追風の、追手も急に來るべし(鶴丸) 船頭舟子を始めとし、近習外様の侍まで追風待つ間の高軒(浦島)

「追風」衣に焚焚ぬ丸香の風につれて薫りくること。後方より吹來る風。順風。

**\*おひかは** 誰が聲立てておひかはや(以呂波)

「追川」魚の名。アサギともいひ急流の川に棲む。鱒をも云ふ。ここの文は魚の名「追川」に「追ひ」をきかせたものである。

**\*おひき** 脛くばる家によつてお引が出る(大經師) 何がなしに三百づつお引をやる合點ちや(萬年草)

「御引御引出物から出た語で、吾物を持つて來てくれた使者に與へる祝儀。心附け。

**\*おびく** 金商人のお泊と近郷残らず觸をなし、盗人どもをおびき寄せ(十二段)

「おびく(帯引)の約。吹き誘ふ。易林本節用集に、「帯出。帶入。腰裏屋本。節用集」に「帯引」。

**\*おひげのちりと** お出入の大小名、追從けいあん按摩摩、お髭の塵取(兼好)

「御髭塵取」人に髭留。ふ者を云ふ。貝原好古編、諺訓に「御髭の塵を取。これは髭留ひて追從する者を云ふ。諺也。事文類聚云、魏涼公爲相。丁晋公(丁謂)委之知政事。嘗會飲都堂。羹。公頻謂起拂之。公(魏公)正色曰、身爲執政。須爲三聖相拂。謂之。謂之。事世話によく叶へり。好色二代男。卷之三。宋僧の孤福の條に「此所の髭塵の塵を取りやめて、白川の流の末に萬代を祝ひの水、お龜酒屋となること日領上戸の娘也。」

**\*おひし** 弓手の乳の下、馬手のおひし(源義經)

「馬手の腰の左右の猛んだ鹿。源注倭名類聚抄に「按於比之波利。帶御之上。今俗者呼比。比。比。或呼與和古之。腰左右腹内處也。」

**\*おひする** 肩に笈拵同行二人、誓の舟に任せ行く(嵯峨天皇) 佛前に供へたる願禮の笈拵を廣げて金銀を押包み、やがて頸にぞ懸けにける(實古教傳)



「笄簪」巡禮者、背に著る一種の衣である。もと笄を負ひて背の摺を防ぐ爲に著るより起つた名。羽織に似て袖なく、兩脇在る者は兩側を赤地に、中部を白地にし、兩脇なき者は兩側を白地に、中部を赤地にした。

\*おびとり 太刀掛じては悪しかりなんとするりと抜きて、帯取をふつつと切つて切放し(酒呑童子)

\*帯取 太刀の足金にからみて腰に纏ふ緒。[追取]行人を追ひ劫、かして衣服を劫ぐ者。行劫。

\*おひばら 奏者役番頭千三百石までお取立、追腹ほどの御恩の家(丹波興作)

\*追腹 主君の死の後を追うて御腹すること。殉死。

\*おひやくと 丹波屋まではお百度ほど尋ねれど(曾根崎)

「御百度」神佛に御願をかけ、往返百度母度神佛を拜すること。黒川道徳編、日記記事、正月二十五日の條に「男女有宿願、則御百度、百度、毎度拜す神前、是謂御百度。」

\*おひろひ 元のやうにおひろひと言はれて、詮方なげ首に心も染まぬ歩み振り(日本武尊)かちおひろひもお身ごなし(安土進)お乗物にも召しもせず、ようおひろひなされたと、被衣とりどりもてはやす(弘徽殿)

「御拾御歩行。歩むを「ひろふ」といふ。」ひろふと見よ。

おひわけの糸 (反魂香)

「追分繪」おほつゝに同じ。その條を見よ。

おひさきしよ おへきしよを背く不義の科(雪女)

\*おへさま 女は亭主と座を組みて、おへ様顔してゐたりける(重井簡)おへ様にもお目に懸らうと存じ参りました(水朝日)かみ様おへ様へ頼み上げます御訴訟事(今宮)

「おびん」おびんを打つ(悪)を見よ。おびん これおびん、旦那がいなれたらもう樂ちや、諸はうと踊らうと夜中までおこちのもの、おこちへおこちへ招かれて(安桶)

「おび」御比に撥置んの増加した語「おび」はおびくに「御比丘尼」の略。「うたびく」に見よ。

\*おへきしよ おへきしよを背く不義の科(雪女)

「御鹽書」法合などの紙紙。大奥の法度書。

\*おへさま 女は亭主と座を組みて、おへ様顔してゐたりける(重井簡)おへ様にもお目に懸らうと存じ参りました(水朝日)かみ様おへ様へ頼み上げます御訴訟事(今宮)

この語も「おへさま(御上様の略で、中流以下の家庭の主婦をいふ。江戸では上をかみと訓んで「おかみさま」といふ。泉林子の頃には「おへさま」「おへさま」お家様ともいふ)と、彼れ作女殺油地獄に「よ業の姐子達やおひ(様)がた」と見えたる。浪花方言寫本、文政二年版に「お家さん、まづ大體通例此通唱ふ、江戸にてかみさまといふに同じ」と見え、但言集纂に「おへさま。御家様也」と見え、おへへをいふ。

おほあらめのよろひ 大あらめに篠金物うつたる(鐵線田)

「大荒目」鐙目は間の轡。普通の鐙は割小札であつて、札の小なるを纏れるものなれども、大荒目の鐙は割小札にせずして横に長くし、その小札の鍔を二三枚重ね、鐵などを交へて礼厚く、綴緒も太くして、粗く纏つた鐙である。この鐙は頗る重いから常人は着ないで、爲朝のやうな剛力な者が着たのである。保元

物語、卷一、新院御所門々かため軍評定の條に「白き扇履をもて纏したる大あらめの鐙。」

\*おほうちがた 金の取手は讀み人知らず、大内がたより御穿鑿(淀鹽)

「大内方」大内は朝廷、朝廷方。この文、古今和歌集に讀み人知らず、且つ歌人は大内方の人が多しから、讀み人知らず、大内がたといひつづけた。

おほうちぎり 大内桐おほひかけたる(挾箱丹波興作)

「大内桐」五三の桐をいひ、五三の桐を旗標にした名物裂。

\*おほかま おほかまのいぬめらに懲り果て死ぬる身(調色)

「大鎌」大邪曲(かま)を見よ。

\*おほかりまた (松風)

「大雁股」雁股(その條を見よ)の大なるもの。おほきなせんざいさんざんそう

れ又能の番附、大きなせんざいさんざんそう、脇能身の程をしら(酒呑童子)

「翁」千歳、三番叟(をもちつて)大きな前藏(散々)にきかせたのである。翁とは能樂で翁の假面を被つて行ふ曲の名。千歳とは能樂で侍鳥帽子に素袍を着て小刀を佩き、翁に附隨して出て謡ひ舞ふ役「三番叟」はその條を見よ。翁の曲は能の最初に演じたもので、翁千歳、三番叟、面首の四人出る(但下懸では面首の役を別に置かぬ)。

おほぐし 嵐山の重忠は馬を負うて助けし(強力(絶好))

「大串」大串次郎と云ひ、武藏國の住人である源平盛衰記、卷三十五、高橋宇治河を渡る條に、大串次郎が宇治川にて流されたのを、嵐山重忠に助けられて岸に投上げられたことが書いてある。

\*おほぐち 赤地の錦の着衣長に美精好の大口・重代の大佩刀(珍常盤)

「大口」大口袴を云ひ、昔行はれた袴で裾の口が廣い赤大口・前張の大口は公家業装束に用いられた。武家で直垂のとき用ひたのは、能樂の時に用ひる大口のやうで裁縫少しかはつてゐる。

おほぐれ 恰好こそは大きぐれなれ、昨日今日の前髪を姉というても大事ない(今宮)

大塊の義(おほ)。體格の巨大なことを。

\*おほげさ 源氏右兵衛佐殿の御手に掛つて成佛せい、さあお慰みに大袈裟を遊ばせ(冷泉節)

「大袈裟」左肩から横腹胸背より僅に下部にかけて到り、袈裟をかけた如くに斬下げること。試斬に大袈裟小袈裟の法式があれど、それまで書くには及ぶまい。

おほげは 大下馬の道具止、四尺四面の立石えいやつと引起し(安土進)

「大下馬」下馬の標に置いた大石、また木のち。

おほこ その器量のよさおほこさ(分鏡) 田舎生れのおほこ、彦七なほも心浮れる、其おほこながなほうまし、そさまを手に入れん爲(女権)

「おほこ」初子の轉訛で、うぶな子の義。初心、世慣れないで初い。

おほさかぢゆんれい (曾根崎)

「大阪巡禮」地名部「おほさかさんじふさんしよ」を見よ。

おほさび この童か着ようする烏帽子(大鎌)さびは烏帽子の皺のことである。大

鑛は烏帽子の鑛凸凹粗く岩石の面の如きものにて、立烏帽子・風折等に之を用ゐる。貞丈雜記卷三、烏帽子之部に、「まぼしにまびと云ふ事あり、まぼしのしわの事也。」

**\*おぼしやうらう** 大上萬・小上萬。  
〔大上胸〕海人藻芥に、「大上胸と申すは攝家の御女也」と見えてゐる。磨して幕府及大名に仕へる最高位の女を云ふ。

**\*おぼすなかし** 〔おちすなかし〕を見よ。

**おほたか** 文箱明くも戀人に大高の結び文(杵笄) お乳の人はおほたかにお菓子さまさま文匣に盛入れ(舟波與作)小姓衆お硯、御祝儀に一首仕らんと、ばや御機嫌におほたか(三國志)

〔大高〕大高檳紙の略、大形の檳紙を云ふ。古くは檳皮で製したれど、後には楮皮で製し、厚くして白く、面に皺文あつて上品な紙。黒川道祐撰、羣州府志七、土雁門に「檳紙黒備中來、其織之人自古有家領、此紙編官口直檳紙等用之、或號大高小高、或稱引合、又調引、大小高則細大小之號也。」

**おほて** いで、これから大手の敵を一當あてて追散し(國性爺) 六波羅の大手門(女護忠)

**おほと** 今川との子と申しては大殿の前がすみませぬ(傾城佛原)

**おほのころも** 頼みありげの御氣色にて、おほとのこもる御涙(弘毅殿)

**おほと** 心はさすがおほとりの、

**おほつぼりう** 大坪流の鞍の内、稽

**おほじやうらう** おぼるぞめ

**おほと** 千里一翔源氏の運、末頼もしうぞ聞え(だいほう)折。

**おほと** 大鷲(だいじう)の條に、「まぼしにまびと云ふ事あり、まぼしのしわの事也。」

古に心染手綱(養櫻三) 〔大坪流〕大坪磨秀の始め馬術の流を云ふ。磨秀は上總の人、足利義満及義持に仕へ、歌舞を善くし、鞍籠を作る妙手であつたと云ふ。術を善くし、鞍籠を作る妙手であつたと云ふ。

**おほつゝ** 物もえ言はぬ吃めが推参千萬、似合たやうに大津繪畫いて世を渡れ(反魂香)

**おほなかくろ** 二十四差いたる大形に作りて馬印をた繪替したるもの

**おほぶく** まづ大ぶくの口明に變つた咄がこんす(壽門松)

**おほふせり** 助右衛門目をさま、どいつらも大ぶせりと、提げて出でたる行燈の(大經帥)

**おほみのやり** 誰白川は大身の鎧(大身輝)

**おほめつけ** (虎が唇)(最明寺殿)

**おほも** 町中俄に騒出し、棒よ熊手よ提灯出せ、大門打てとひしめ(登門松)

**おほゆな** (ゆな)を見よ。

**おほよこめ** (國性爺後日)

**おほよせ** ゆふべゆふべの大奇は豊なる世の續なり(女殺) 一つに張出す大奇に名取の松梅二十五人に十八公(鳥八立)

**おほるり** 大るり・小るり・つばくらめ(娘)

〔大門〕遊廊の出入口の門の稱、大門打つとの「打つは閉ぢる意」うづ見よ。大門の門眼については三番太鼓の條に述べて置いた。また遊廊内に狼藉者ある時は、それを捕へて詮議する爲に大門を閉ぢて出入を遮いだ。

**\*おほゆな** (ゆな)を見よ。

**\*おほよこめ** (國性爺後日)

**\*おほよせ** ゆふべゆふべの大奇は豊なる世の續なり(女殺) 一つに張出す大奇に名取の松梅二十五人に十八公(鳥八立)

**\*おほるり** 大るり・小るり・つばくらめ(娘)

**\*おほり** (大瑠璃瓶雀籠に懸し、雉は上面瑠璃色をなし、雌は懸棧色の羽手をしてゐる)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

〔大戸目〕大目附の異稱である。その條を見よ。

**\*おほよせ** ゆふべゆふべの大奇は豊なる世の續なり(女殺) 一つに張出す大奇に名取の松梅二十五人に十八公(鳥八立)

**\*おほるり** 大るり・小るり・つばくらめ(娘)

**\*おほり** (大瑠璃瓶雀籠に懸し、雉は上面瑠璃色をなし、雌は懸棧色の羽手をしてゐる)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

**\*おほら** (春)の山邊の脇染(五人兄弟)

たり。歌舞身に餘り宅にかへる折から、初春の月色古人千金にもかへといひけんかかする時をやと、行く行くふと此染を工夫し染出す。世間其實して大きに利を得て富貴す云々」

おほわたし 内かけ外かけ大わたし

鳴の羽が(へし井筒)

〔大渡〕相撲の手の名。上手に敵手の首を抱へ、差手に力をこめて敵手を引付けながら、腰に力を入れ掻き被つて敵手を云ふ。

\*おほわらは 和藤内もおほ童、虎も半分毛をむしられ(國性爺) 三保谷今は叶はじと、大童に戦ひ悩まされ(吉野忠信) 女の働甲斐もなく、散散に斬立てられ、吉祥天も大童に戦ひて(釋迦)

〔大童〕大なる童形、即ち頭髪を振亂したことを

\*おます 地侍の身上過分の價は心に任せず、何れもの骨も偷ます、酒手程はおませう(浦島) 二人の衆にも酒おませ(博多)

〔おますらす〕(御参)の略。差上げる、進上す。(別)におありますの略、御座りますの意をもなす。

おむくむく おきさばかりが女房か、あの様な洒落者よりおむくむくむくの手入らずを抱かせうぞ(今宮)

〔おほは接頭語〕「おほむくむく」は肥えふくらんださま。おつくり。肥えて肉付のよきをいふ。

おむす おむすが着物にありあはせた(綴子三本(博多))

〔おむすめ〕(御娘)の略。

\*おめもし 御用とは何ならん、おめ

もじ様にと夕顔の、庭の飛石すすな(蠟山姥)

〔御目文字〕御目と懸るの文字語。文字語は、足利時代の末期朝廷式微にして供御のもの備はるるに爲に、女官等その名を呼ぶを忌みて、何文字と云うた體語から起つたと云ふ。

おもうし 今日のおもうしも魚相程御意に入る(庚庚申)

〔おもうよし〕(御催)の詠略。おもてなし。御靈應。

\*おもかぢ よせくるくる波もよせくる、おもかぢとりかぢ拍子そろへてさ(女權) おもなげにしておもかぢや、やうやう陸にぞ上りける(小栗判官)

〔面杖〕柁柄を左に取る事。左柁を取れば、袖右に向く。和漢船用集に「左柁と書いて」おもかぢと傍訓してある。左柁は右柁の對

\*おもさし 見れば面さし顔のかかり、若年の昔勤當せし我が子の小山田太郎高家に似たり(女權)

〔面さ〕顔容。おまけ。

\*おもだかまどし 澤湯絨の腹巻(鎌田)

〔澤湯絨〕袖を草摺を地と異なる色絨、或は種々の色絨をまじへて衫形に織し、その形が澤湯の葉のやちになつてゐるより云ふ。

おもちづつ 御持筒の鐵砲大將百五十石取つた人(女腹切)

〔御持筒〕江戸時代に鐵砲組の武士の稱。

\*おもつら 鰯香背の匠一文字に駈來り、籠頭取つて引留め(振袖始)

〔籠頭〕馬の頭から鬚にかけて結んだ飾り紐。

おまが、倭名抄に「唐語云籠、音籠、漢語抄云、籠頭、於毛都民、籠頭也、籠、音基、馬

籠頭也、今案籠頭籠頭也」

おもてこじやう 「こじやう」を見よ。

\*おもてぶせ 若し此里には居ればこもかと尋ねるも面伏せ、聞かれぬ心落着かず(酒香童子)

〔面伏〕不面目。

\*おもとびと 内侍命婦のおもとびと(抱符)

〔御許人〕御許近く仕へる人。侍者。侍女。

\*おもひびき 吹きて亂るる薄煙、空に消えてはこれもまた、行方も知らぬ思草(會根樹) 相合せせる思草、思ひし甲斐もなつたの蟬(丹波與作)

〔思草〕煙草の異名。栗綱露に「本草洞詮といふ書新に渡り、その九卷に煙草を出す。曰く、煙草一名相思草、言人食之則時々思想不能離也、……唐詩紀の内李白詩に相思如烟草、歷亂無香といへり。相思草と名づくるはこれより出づるにや、偶然に符號せるにや。李が詩は本より煙と草とのこと也。

おもひのたま ありて海よりひなほ深奇縁の龍女、懃の誠の珠、思ひの珠・奇縁の龍女、通ふ心の玉手箱(松風)

〔思珠〕新拾遺集、藤原に「人知れぬおもひの珠の緒絶えなば何てあはれ歌をとらまし」とありて、おもひの珠は念珠を云ふ。この文は、思ひの魂にかけたのである。

\*おもひは 鳥類ながらともしなきに泣死せし此羽も、夫婦が中のかたみぞと持ちし片羽は思羽の(用天皇) 雉子の風切思羽や、思の數を一つと二た三、四(雪女)

〔思羽〕鶯鶯、鳴雉子などの尾の兩脇にある銀杏葉形の羽。

おもひばか 必らず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ、男の間男前にて思ひばかいかぬものぞとよ(重井筒)

〔思ひばか〕いふ語、はかどる意の「思はか」附いて「思ひばか」といふ複合語になつたのである。思ふやうにはかどること。西鶴雜留・卷三に「石車を銀にしてほしやと願ふに、思ひばかゆかすして自然とまらねばならぬ首尾になつて、杉邊子(享保五年刊)卷一に「一生思ひばかゆかす」はかしの條をも見よ。

\*おもや (酒香童子) (生玉)

〔母屋〕おもは主である。おも屋は主室本屋の義。本家。

\*おもゆ 今朝はおもゆばつかりで、何も喉が通らぬ(水月)

〔おもゆ〕(御糞物湯)の略。飯を炊いだけ。

おやこ 大身の武家に親子もあるそいの(夕霧)

〔親子〕親戚の意。俚言集覽に「武蔵の忍のあたり親類を親子といふ、伊勢にてもしかへり」とあれど、他地方でもいふ。

おやしきやく 此前大阪お屋敷敷役の時、新町通ひに夕霧と云ふ太夫に馴染をかけ(夕霧)

〔御屋敷敷役〕御屋敷の役人。徳川時代に諸藩主や幕府麾下の土が大阪に所有してゐた邸宅を、御屋敷といひ、領地の産物を販賣した所で、領主から定計又は一年交替の役人を置いた、この役人を留守居と稱した。

\*おやじやと 耻かかせて意見せよと親じやと人の遺言か(徒戀)

〔親者人〕親にてある人。此語も「親ぢや人の義であらう。親を親者人、母を母者人、兄を兄者人などいふ間に、封徳時代に武士の間に流行はれ、町人の間にも用ゐられた。

おやぞん 搦手の明けずの門、乗越す壁の扉瓦、踏留め踏締め滑るは足のうら若き、心も親ぞんがにはり者(國性爺後日) 主あしらひの無念さよ、それなりけり親の孫、父川文入道病死あり(聖徳太子) 天晴武功の親孫と、母は悦び限りなし(杵釘)

「親孫」は後継の意。轉じて嗜好性癖などの遺傳をいふ。親孫とは嗜好性癖など親の遺傳を顯ふこと。親の孫とは親の後継たるに恥ぢぬこと。意「そんづく」を見よ。毛吹草に「聲よきは親ぞんなれや郭公」。武功の親孫とは、武功ある親の名を恥しめない子孫の意。

お八つの太鼓 早明方のお八つの太鼓の聲は高田の寺(舟波與作)

太鼓を打つて八つ時を知らせたので、晝夜二回ある。晝は未の刻(今の午後二時頃)、夜は丑の刻(今の午前二時頃)。

おやつが 醒井の親粒もまだ入れてやるまいな(女腹切)

「親粒」鮫皮の普通通りの眞中筋を粒所と稱し、粒所の上方(頭の方)の最も大きな粒を一つ粒と云ふ。親粒とも云ふ。鮫皮は粒の大きなのを賣込んで、親粒のない皮には他の鮫の大粒を賣込んで、それを親粒を入れる云ふ。その入れ方に二法あつて、親を附けて壊込むのを入と云ひ、翻で貼らないで縁にて敷込むのを生入と云ふ。稻葉通油環、鮫皮精粒に、「この入れ生れの見様を一概に心得ては見誤る事あるべし。少しにても疑はしき所あらば、功者の人に質して鑑定を請はしくすべし。殊に京大阪は沙皮細工入上手にて、各其巧みを競ふが故に、目利者と許さる、程の人にてても得

おやま 俗體ながら先達のお山、院號請けたる若手(女腹切)

「お山」大石の高峰山を云ひ、山上が嶽とも稱し、海拔五千二百餘尺、十津川の東に當り、峰頂に藏王堂ありて藏王権現を安置し、其他嶽中に幾多の靈場がある。修験道の山伏が、數度も大峰に峰入し、苦修を積んだ者は何院などと院號を請けて法印と稱するのである。

おやま 好色修行と志し(女摘) 田地を賣つて買ふ故に、それでおやまなふれといふ(二枚繪) 今の世までもみめよき女をおやまといふも、此香久山の謂れなるべし(會釋山) おやまぐるひで酒やら何やら過ぐるゆゑ(女腹切) それに染みたる風俗は、いかなる家にも走り出で、お山けんじと目をつける(泥鰌)

「お山」妓女。寛文以前からみめよき女のあだ名として用ひられ、上は松々天鰯から下は沙影・月々に至るまで、総て天鰯の勸女の總稱で、上方詞である。下位の遊女はともあれ、上位の遊女をおやまと呼ぶは、露骨に云ふ意味を含めて賤しめた氣味がある。おやまの名義に就いては諸説ある。本朝世談(荷)・菊岡房行撰(卷之三)に「おやま。小山次郎三郎と云ふもの女人形をおよつかふ、遊女傾城の類をおやまと云ふにより、これをとおやま入形といふ」。嬉遊笑覽に、この記事を給はりしい書きやうだと云つて、「思ふに上方にて遊女をおやまといふより稱へしならん」(竹野故事に、おやま次郎三郎此遊人の達人なり、京都には貞享元祿の頃おやま五郎兵衛同

おやま 五郎右衛門大藏善右衛門などありと云へり、次郎三郎が弟子なべし) 但し歌舞伎にて女人形に云ふは後の事と見え、そのかみは女形太夫くわしやがたは見ゆれど、おやまの姓名し「おやまは何の義にか。小野頼風が妻女郎花になりたる故事は男山に名高ければ、藍色の義をとりていふ。又さまざまあらず唯女人形の名なるべし。京都黄色に山猫と稱するよりの名にはあらざり。おやまは人形の名なり。一説に思へらへ、眉纏を付くこと、還山の如くす、これを以て名づく。今妓婦の通稱となすといへり。延寶八年次郎三郎人形上覽あり。おやま二郎三郎なりし」。おやま二郎三郎なりし。おやま二郎三郎なりし。おやま二郎三郎なりし。

「おやま」は、遊女の色香に迷うて、遊興にうつろふかすこと。「お山見」は「お山見物、即ち遊女を見物すること。見じはけけんぞ」轉であら。源氏物語・竹河の巻に「侍従の君けんぞし給ふとて近きさぶらひ給ふに。古今著聞集卷十六、興言利口の條に「孝道入道仁和寺の家に、ある人と雙六をうちけるを、隣りにある越前房といふ僧來りて、見所すとて様様のさかしらをしけるを、にくしくしと思ひかけれども、物もいはずのちのりたるに。但言集覽に見所を見物と解してある。

おやま 乃うお山ぶ、世に酒ほどの樂しみなし(酒吞童子枕言葉)

「おやまぶ」は「お山見物の略。修験道の山伏であつて、護摩を焚き呪文を唱へて祈禱をなす儀要である。天台宗に屬する者は有髮、眞言宗の行者を祖として、彼の行者は小角と號し文武帝の時の人、この道を修験道と號す、山居して難行苦行するを以て業とす」。

おやま 乃うお山ぶ、世に酒ほどの樂しみなし(酒吞童子枕言葉)

「おやまぶ」は「お山見物の略。修験道の山伏であつて、護摩を焚き呪文を唱へて祈禱をなす儀要である。天台宗に屬する者は有髮、眞言宗の行者を祖として、彼の行者は小角と號し文武帝の時の人、この道を修験道と號す、山居して難行苦行するを以て業とす」。

おやま 乃うお山ぶ、世に酒ほどの樂しみなし(酒吞童子枕言葉)

「おやまぶ」は「お山見物の略。修験道の山伏であつて、護摩を焚き呪文を唱へて祈禱をなす儀要である。天台宗に屬する者は有髮、眞言宗の行者を祖として、彼の行者は小角と號し文武帝の時の人、この道を修験道と號す、山居して難行苦行するを以て業とす」。

おやぞん おりない

すお歴々にも負けることばおりない  
いさ(鐘樓三)

「おありなり」(胸有無)の略。ありませぬ。こ  
ぞらぬ。この語は、能狂言や、戲言養氣集(元  
和年間)の古活字版)の中にも見えてゐる。西  
澤一風撰・伊達妻五人男(寶永四年刊)巻之二  
に「これ庄九郎様、このお客に御用あらばわ  
い承らん。いやこなたに用は何にもおありな  
い。但書保賢に「をりない。御座ないをラリ  
ナイと云、居なりの義なるべし、能狂言によ  
くいふ言也、醒睡笑に見ゆ」。

\*おりは 鯉も溜へのほり詰め、今で  
はどうもおりはがない(淀鯉) 駕籠  
なばやもりはの乞目さぶ六の十八  
九なるかほよ花(曾根崎)

「下瀬」おりきは。曾根崎心中のこ、女は、  
駕籠を下瀬に雙六の折羽をいひかけたのであ  
る。をりは「はその條を見よ」。

\*おりや 首の締めやうなほ知らず、  
おりや如何して死なうぞと、獨言  
して泣き給ふ(實古教信)

「おれ(己)は」の説。  
「おれ(己)を見よ」。

\*おりる 京のつかさは關白殿、おり  
るのみかど目のもくだいり(大經師)

おりるの後ば例もあり、在位の身  
にてまさなき事(酒香童子)

「下位天皇御位を退き給ふこと」。

おりゐの衣 乗物をおりゐの衣たち  
寄つて(衣橋山) 梅菴御見舞四枚  
肩、おつゐの衣長羽織(夕霧)

\*おれう 私は今熊野貞月と申す比  
丘尼のおれう、二十三の弟子二  
人勸進に出て(酒香童子)

「おれうにん」(胸贅人)の略。比丘尼。尼。狂  
言比丘貞に、「この御れうを皆おんおあん  
と仰せらる、程に」。

\*おれそれれ 人のおれそれ世の中  
の、義理順義を知るが最期貧乏神  
のりうつる(酒香童子) 擔ひし棒  
のおれそれれ、御免を受けて隔て  
なく(井筒)

「己某己であるとか某であるとか、彼此善  
惡の取沙汰。  
おろおろ 涙にくれけ  
れば(福山雄) おろおろ涙の腹立  
聲(生玉)

罵々の義、うるむ状にいふ「おろおろ涙は  
涙に目のうるむこと佛母摩耶山開帳(元祿六  
年刊脚本)に「清松はおろおろと歎けば」と  
あるも、泣いて聲のうるむ状をいうたのであ  
る。「うろ覚え」おろ覚え「うろろ」おろお  
ろ「なぞいふ」うろ「おろ」は同じ意に用ゐて  
ある。

\*おろか 世帯廻り商賣事、何に思は  
なければども(冥途飛脚) あらおろか  
や、忠信の御事は目の下に於てか  
くれなし(凱陣八島) 虎はおろか、  
象でも鬼でも一挫ぎ(國性爺)

「おろそか」(疎)の略。風と書くは當字である。  
おろかし、あやおろかし、い事いふ  
人ぢや(大經師)

「おろか(愚)を形容詞にした語はからしむ。  
あはらしむ。

おろしあゆみ おろし歩みの道中

は、花の立木の其儘に、ぬめり出  
でたる如くなり(浮城香)

「下歩」足を踏みおろす(やうに)、どつしどつし  
と徐に歩むこと。「くろあゆみ」をよ見よ。

\*おろしくすり さいかに、おろし  
薬を飲ませしにかへつて平産しけ  
る(用明天皇)

「おろしくすり」(體胎懸)の略。  
\*おろせ 軒のせ履うて草鞋がけ(女  
腹切) 九軒のおろせが揚銭の残り  
も今日ばすつきりと取つて(二枚繪)

「即」彌羅昇。色即通ひの彌羅昇は、遊女屋と  
は特別の親意があつたので、遊敷に出て客を  
とりもつたり、客の遊興時節の保護人にな  
つたり、麗屋や娯屋や遊女などの使となつて  
用き、をする場合もあつた。生玉心中に「こ  
れ彌羅の衆頼みませ、私は雨氣で頭痛がして  
休んでゐると間に合せ、盃の相手になつて  
日頃の手並にいきつがして下んせ」と見え、  
中二枚繪草紙に「彌羅の長介來り、私が調合  
の葷屋の花代、律の屋敷の料理代、合せて三  
百四十五匁六分、我も頼もせがまれます」と  
あるなどは、これ等の消息を語るものである。  
彌羅昇を即といふ名義に就いては詳でない。  
一日千軒(寶曆七年刊)に「中頃名高き大盛あ  
りて女郎に實盛七年刊)に「おろせの義、お  
ろの者三人抱置き日毎に赴く。或時出口にて  
彌羅を知して、是より歩行にてお出遊ばせと彌  
羅言ひければ、大盛大に氣色を損じ、行け  
と言はど何處まで行くに、即せと異名を  
即せよと言ひしより、彌羅く者即と異名す  
るとなり」とあれど、附會の説を信するに足  
らない。嬉遊笑覽に「おろせの名義といをか  
ら。按ずるに即は彌羅に乗るは修客の至りな  
れば、彌羅昇と稱ふことを傳つて、異名を呼  
びしものなり。字書に舍、車解馬放、衣解、甲

皆曰即、今舟人出載亦曰即など見えたり。  
總て積載せたる物を下す事なれば、唯荷物の  
やうにおほめかしらるるにこそ」とある説も  
いかに、野良虫(萬治二年刊)の序文に「老居  
終れば東山にとまらぬ、あんだ乗物に載せら  
れて、はいはいおろせとおもひ進む」と  
見えてみれば、おろせは彌羅昇の一種の掛聲  
であつたのが、彌羅昇をいふことになつたの  
であらう。

おんざう  
「おんざう」を見よ。

おんこはう 只今此濱にて鳴の鳥  
と蛤、稀代の業を見受けしより、  
軍法のおんこはうを悟り開いて  
候(國性爺)

「おんこ」を見よ。  
おんこはう 光照歸朝安平にて、易の  
おんこはうを傳へ探つて末書残らず  
取持たせ急ぎ參内申さるる(以呂波)

前條の「おんこはう」と同じ語であつて、「お  
んこはう」と字形が誤つたのであらう。種は、  
蓮など、蓮形が誤つてゐる。「おん」と讀み  
誤り、奥は草書海に、興興の草體相似し、  
鐘頭屋本節用集に「一興」など見えてゐるや  
うに、興に似てゐるところから誤つたのであ  
らう。この類の誤は「きんあん」その條を見  
ても見られる。さて果林子作を通じて「う  
んあう」(鐘裏)と明記してゐるのが、當ら  
ぬも發考になるであらう。(後世の活版本は  
勝手し改めてゐるから發考にならないのである)  
鐘裏はおんこふかきこと。玉篇に「鐘。積  
也。聲也。蓄也」。

おんざう  
「おんざう」を見よ。

おんざうし  
「おんざうし」を見よ。

**おんじやる** 「おんぢやる」を見よ。

**おんぞうあぢ** 「おんぞうまぢ」を見よ。

**おんぞろ** 化物ならばおんぞろか、たとひ誠の人間にても手練を見よと、太刀さしかざし(實古教信)

「おんぞろ(鬼族)の撥音歌。鬼で候の義。奥。「ぞろ」は「節季ぞろ」又ぞろ」などの「ぞろ」に同じ。

**おんたらし** 抑も暮目と申すことは、天竺のおんたらし、我が日本の天の香具山の黄楡の木(天竺)

「おんたらし(御執)の輦。御弓。萬葉集巻一に「夕庭伊織立の御執乃枝弓之奈加理乃」平家物語巻十一、弓ながしの條に「御たらしなりと申すとも」

**おんぢやる** 釣屋形にぶち乗つて、一つ買をもした者でおんぢやり申したさ(加増曾杖)

「おぢやるに撥音、ん増加した語。おぢやる」を見よ。

**おんてもない** 六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや、おおんぢでもないこと、たとひ畜生界に落ち蟲けらに生るとも、同じ蟲に生れうと思ひつめたが(今宮)もとのやうに懇にかはゆがつて下さるか、おんぢでもない事、女と縁さ一切つたらば(萬年草)

當然である。勿論である。言ふまでもない。按ずるに「おん」は「恩がまし」「恩がら」などいふ恩であつて、「おんぢでもない」は即ち「恩でも無し」の義である。この詞、狂言・笠の下などにも見えてゐる。

**おんてん** 御願私願隱田押領寺社盜賊等までも、現非を判ち治めんと(佐々木)

「隱田(彌田)をこましくして課税を避けた田地。和訓栞に「おんてん」屋訓往來に隱田と見ゆ、田園を隱し置をいふ、隱田といふ語は類聚國史、東鑑などにも見えてゐる。

**おんども** 「おん」を見よ。

**おんども** おんどもが二十七の年薩摩者と喧嘩した話(博多)

「おれどもの長崎國説。吾等、この語現今も長崎地方で用ゐられてゐる。熊本地方では「おんども」鹿兒島地方では「おんども」といふ。

**おんぼう** うぬが組袍、腰に指いた赤鯛も早く此處へまげ出せ(龜山遊)

「組袍。羅はからむしの綿入を云ひ、袍は衣のなかつたあるものを云ふ。組袍は即ち綿入の服であつて、衣の賤しきもの。論語子罕篇に「衣敝緇也」。

**おんまはす** わり立ておんまはし、火水になれとぞ戦ひける(女楠) 割立しておん廻し、無二無三に斬入れば(國姓爺) 蜘蛛手かくなわ十文字、割立ておんまはし。さんざんに斬立しておんまはし(反魂香)

「おんまはす(追魂)の詠「まが黒にかゝる音である爲に、その上の「ひが鼻懸」になつたのである。

**おんやうけ** 陰陽家には、せんきゆの蛙息を吐いて虹となると沙汰せり(蛙合歌)

「陰陽家」古くは「おんみやうけ」と讀んである。中古陰陽家に仕仕、天文新歌のことを掌り、陰陽五行の理によつて吉凶を占ひ、災禍などを祈禱する者、陰陽師ともいふ。

**おんら** おんらが在所(博多)

「おれら(白等)の長崎國説「おれども」おんども」といふ同じ言方である。

# か

**か** お年寄の我が強く(大經師) 親がかくまふと聞えては、さきに我が立つて免したうても免されぬ(大經師) 某も男の我が(曾根崎) おのれ重れ去られたらば、顔も見るまじ物言ふまじとの我もありし(曾根甲)

「我我強。意地張。

**かい** 我はすなばち摩訶迦葉戒授け申さん(釋迦)

「戒制禁の義。戒は防非と懇の力あつて、これに止持と作持とある。この二持戒を行するに於て五戒・八戒・十戒などある。戒授く」とは、五戒・八戒・十戒等の戒律を佛弟子・信者の境遇に應じて、その何れかを授けるを云ふ。「かひ」を見よ。

**かい** 諏訪へ踊見がい行く行違ひに(博多)

「かてらまたは」にの意にいふ長崎國説で、現今も用ゐられてゐる。熊本では「見きや」といふ(これと別に「がい」といふがある。「がい」を見よ)

**かえき** 殿様のお耳に立てばよい仕合で御改易(夕霧) 御機嫌に違ひ、改易仰付けらるるとて御恨み候まじ(反魂香)

「改易(徳川時代に武士の受ける刑であつて、

族籍を除き家祿を召上げられるもので、切腹よりは輕く墾居よりは重い。

**かいかね** おしつけの外れよりかいかねかね 斬込まれ(世繼曾杖)

「群雨臨の背の高くなる所。徳名抄に「群。番甲、加以加爾、今俗語呼加以加良保備、肩之下也」。

**かいき** がいきを祈るは風の宮(女殺)

「吸氣風邪。飯頭屋本・節用集に「吸氣」今も福井縣越前郡あたりでは、風邪を「かいき」と云ふ。

**かいきやう** 此母が戒行の拙きゆゑと(龜山遊) 妻二人子二人の命を取つて忠孝の道を立つるあさましさ、恩愛慈悲の道缺けて、心に任せぬ戒行やと、顔を見てはわつと泣き(大難冠)

「戒行」一旦戒體を發得した者は、能くその戒體に隨順して行ひを正しうすること。翻譯名義集に「戒行清高、總業優勝」。

**かいく** 馬上の武士の袷上下皆具まで(女殺) 小栗御覽じ、遂に召されぬ馬ならば鞍かいくも候はし、裸脊に乗つて見せ申さん(小栗判官) 馬鞍皆具の綺羅御行(百日曾杖)

「皆具(馬を鞍小)一切の具。

**かいくれ** 朱雀の御所の邊を通れば、貴賤に限らず男たる者かいくれに行方なく、二たび影も見ることなし(女護扇)

「撞著(撞き寄れて)見えぬ義、下打消に應じてる副詞。全く。まるで。

**かかげ** 百由旬の血の池を鐵のかい